

# 自閉症スペクトラム児に関わる療育者の発話分析

荒井 沙也香<sup>1</sup> 中村 真理<sup>2</sup>

本研究の目的は、言語でのやりとりに大きな制約のない自閉症スペクトラム児との会話において、療育者がどのような種類の発話を用いているのか、また対象児にとって応答しやすい発話とはどのようなものなのかを検討し、療育者が対象児との言語でのやりとりにおいて工夫すべき点を見出すことであった。自閉症スペクトラム障害を有する2名とその療育者を対象とし、学習場面での会話を逐語に起こし、7つの発話カテゴリーに分類した。そして、それらの発話生起率と対象児との会話成立・不成立の割合から考察を行った。その結果、療育者の発話の傾向として“説明”を用いることが多いこと、“質問”や“賞賛”の使用が少ないことが見出された。また、“賞賛”において、会話不成立となる割合が高いことが認められた。会話不成立場面での発話特徴として、“説明”では言語外の意味の推測を要する発話や療育者が対象児の発話を別の表現に置き換えた発話、“呼びかけ・提案”では情報量の多い発話、対象児の注意が他に逸れている時の発話、“質問”では漠然とした内容、疑問詞質問、療育者からの聞き返し、“賞賛”では内容が不明瞭な発話が挙げられた。以上の結果から、自閉症スペクトラム児との会話においては、曖昧な表現を避け、内容を省略することなく、丁寧に伝えるなどの工夫が必要であると考えられた。疑問詞質問への応答に関しては、文脈や聞き手が求める内容を考慮して返答するといった応答技能の必要性が対象児に返答の困難さをもたらしていると考えられた。賞賛においては、褒める内容を具体的に示すとともに、対象児の気持ちを療育者が言語化して伝えることが、工夫できる点として考察された。

キーワード：自閉症スペクトラム障害、療育者、発話分析

## 問題と目的

2013年5月に米国精神医学会のDSM(Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders)が改訂され、DSM-5が出版された。このとき、「広汎性発達障害」の名称の変更とともに、その下位分類が廃止され、「自閉症スペクトラム障害 (autism spectrum disorders : ASD)」として包括された。自閉症スペクトラム障害は、社会的コミュニケーションの障害と常同的・限局的な行動の2つの領域によって特徴付けられる障害である。その中でも、社会的コミュニケーションの障害として挙げられる言葉の発達の問題に関して、伊左治・根津・高林(2012)は、子ども側の問題として捉えられがちであると指摘し、言葉をコミュニケーションの観点から捉えると、言語発達は人との現実の相互作用という経験を通して行われるものであり、子どもと日々接する養育・教育にかかわる大人は、重要なコミュニケーション環境と考えることができると述べている。また、竹田(1994)は、コミュニケーションの成立には、問題を持つ子どもだけでなく、もう一方の担い手である大人の要因も相互客観的に評価することが、コミュニケーションの促進のために重

要であると指摘している。井上・小川・藤田(1999)は、疑問詞質問の語順変化が自閉症スペクトラム児の応答言語行動にどのような影響を与えるかを検討し、「誰が食べてるの?」のように疑問詞の後に動詞語が続く質問形式よりも、「食べているのは誰?」のような動詞語の後に疑問詞が続く質問形式の方が対象児からの応答が有意に多かったと報告している。また、会話を行う際に関与すると考えられる情動の理解に関しては、菊池・古賀(2001)が自閉症児・者に対して顔写真を用いた表情認知能力の検討を行い、健常幼児とは異なり、「嬉しい」の表情認知の優位性が認められなかったことを報告している。さらに、関わり手の先行発話と自閉症スペクトラム児が発する即時性エコリアの生起との関連を検討した研究では、対象児に応答や行動の変化を促す高制約的発話が即時性エコリアの生起関連要因となっていることが報告されている(Rydell & Mirenda, 1994; 廣澤・田中, 2007)。また、廣澤・田中(2008)は、自閉症スペクトラム児からの応答率が高い関わり手の発話を検討し、言葉遊びのように会話ターンの充足自体を目的とした発話と対象児の発話や音声を意図的に模倣するモニタリングで対象児の応答率が高いことを報告している。以上の先行研究からも、関わり手の発話が自閉症スペクトラム児との会話において、何らかの影響を与えていることは明らかであり、その影響をより明らかにすることは意義

1 東京成徳大学大学院

2 東京成徳大学

があると考えられる。しかし、これらの研究の対象児は、CARS(小児自閉症評定尺度)において、中度か重度自閉症に該当しており、エコリアなどの非慣用的言語行動を多用する子どもであった。大井(2004)によると、自閉症スペクトラム児の中でも高機能自閉症やアスペルガー症候群に該当する者は、会話による基本的な意思疎通に大きな問題がないとされていることもあり、実際の生活場面で生じている困難さが見逃されてしまうことが危惧されている。また、畑中(2011)も、発達障害が軽度である場合は良好な語彙を持っていることが多いとされるが、そのコミュニケーションには何らかの特徴がみられると述べており、発語のある自閉症スペクトラム児に特徴的な困難さが指摘されている。このことから、自閉症スペクトラム児は、障害の程度に関わらず、言語コミュニケーションの困難さを有しているといえる。しかし、障害の程度によっては、その困難さが見逃されてしまう可能性もある。

そこで、本研究では、言語でのやりとりによる大きな制約のない自閉症スペクトラム児を対象とし、彼らとの会話における療育者の発話を検討する。まず、療育者は対象児との会話でどのような種類の発話を多く用いる傾向があるのかを見出すことを第一の目的とした。次に、本研究においては、対象児から適当な応答があった療育者の発話を対象児にとって応答しやすい、理解しやすい発話と定義し、どのような発話が対象児にとって応答しやすいかを検討することを第二の目的とした。その上で、療育者が対象児との言語でのやりとりにおいて工夫すべき点を示すことを第三の目的とした。

## 方 法

### 調査対象者

調査は、Z市にある民間の教育機関にて行った。対象は、言語でのやりとりを行える自閉症スペクトラム児2名とそれぞれの療育者であった。(Table 1, Table 2)。a児の療育者はAであり、b児の療育者はBであった。対象児のIQ(WISC-IV)は、保護者の同意を得て、第一筆者が検査を実施した。

### 調査手続き

調査は、対象児aは平成27年3月から8月、対象児bは平成27年4月から6月にかけて、対象児の学習場面にICレコーダーとビデオカメラを置き、会話を記録し

Table 1 対象児プロフィール

性別	学年	所属	診断名	療育期間	IQ
a 男児	中学 2年生	特別支援 学 級	広汎性発達障害 (主障害:自閉症、知的障害)	4年目	50
b 男児	中学 3年生	特別支援 学 級	自閉的傾向がある広汎性発達障害	3年目	49

た。療育者には、普段通りの学習指導を行ってもらった。調査回数は、対象児a, bのいずれも合計7回であった。1回あたりの指導時間は、対象児aが平均1時間、対象児bが平均1時間30分であった。

### 倫理的配慮

倫理的配慮のため、療育者に対して、調査の目的、方法、調査対象児の保護者への説明の仕方について同意を得た。調査対象児の保護者には、調査中断や記録内容の確認の自由、個人情報保護及びデータ管理の仕方、論文掲載について説明し、同意を得た。また、不明な点があった際に、すぐに連絡が取れる状態であることを説明した。さらに、調査対象児と同時間帯に学習を行っている子どもの保護者に対しても、研究についての説明を行い、対象児以外の子どもの声や姿がビデオやICレコーダーに記録されてしまう可能性があること、またその記録は調査に一切使用しないことを説明し、了承を得た。なお、調査は東京成徳大学大学院研究倫理審査委員会の承認を得て行った(承認番号14-1-21)。

### 分析方法

**分析対象** 記録したデータのうち、療育者と対象児の発話が多く認められた時間のデータを分析対象とし、逐語に起こした。分析対象は、対象児aが「漢字検定」と「工作」の時間、対象児bが「漢字検定」と「読書」の時間であった。

**会話成立の基準** 本研究においては、対象児が理解しやすい療育者の発話を判断するために、会話ターンを指標として用いた。会話成立の基準は、三宅他(1974)を参考に、「療育者(対象児)→対象児(療育者)」、「療育者(対象児)→対象児(療育者)→療育者(対象児)→」の場合を会話成立とし、対象児の応答が不適切であった場合と応答がなかった場合を会話不成立とした。また、本研究においては、言語での応答がなかった場合でも、ビデオ記録において行動での応答が確認されたものは、会話成立とみなした。

**発話の分類** 発話は、Table 3の発話カテゴリーに基づき、分類した。この発話カテゴリーは、先行研究(廣澤・田中, 2007; 廣澤・田中, 2008; 館山・鄭, 2011)を参考に、筆者と心理学研究者の2名で数回の検討を行い、追加・整理して作成した。なお、会話成立の有無、療育者の発話分類に関しては、2名の評定者(1名は第一筆者)が該当の場面をビデオで確認しながら評定を行った。評定者の一致率を算出した結果は $\kappa=.811$ であり、信頼性が十分に高いと判断されたため、残りの分類については第一筆者が行った。

Table 2 療育者プロフィール

	勤務年数	対象児担当期間
A	3年6ヶ月	3ヶ月
B	3年	3年

Table 3 発話カテゴリー

説明	対象児に向けて行われる説明, 対象児が話す内容を汲み取った発話
支持・肯定	対象児の発話を支持・肯定する発話
賞賛	対象児を誉める発話
質問	対象児に対して何らかの説明を求めて発せられたり, はい, いいえを尋ねる発話
呼びかけ・提案	対象児に対する呼びかけ, 注意喚起, 提案, 誘導, ある行動へ導く間接的な指示
エコラリア	対象児が発するエコラリア
特定不能	上記以外の発話, 不明な発話

**分析内容** 分析内容は、療育者別の各発話カテゴリーの生起率と各発話カテゴリーの会話成立・不成立の割合であった。

## 結 果

### 療育者Aの各発話カテゴリーの生起率

療育者Aの発話数は、合計で511回であった（“特定不能”、“エコラリア”の合計43回を除く）。Table 3の発話カテゴリーに従い、療育者Aの発話を分類した（Figure 1）。その結果、最も生起率が高かった発話は“説明”で173回（34%）であった。“説明”では、療育者が現在の状況を対象児に伝える状況説明や、対象児の質問に対する返答、対象児に次の行動を伝える説明、曖昧に発せられた対象児の発話から対象児が言いたいことを療育者が汲み取り、言葉を補って伝え返す補足説明、対象児の行動を言語化した発話、対象児の言い誤りを正しく言い直して聞かせる発話、療育者が対象児に対して知識を伝える発話が認められた。次いで、生起率が高かった発話は“呼びかけ・提案”で139回（27%）であった。“呼びかけ・提案”は、療育者が対象児の行動を制止させたり、対象児が自分の状態に注意を向けられるように声をかけたりする時に用いられていた。また、対象児に次の行動を間接的に伝えるために用いられることも多かった。生起率が3番目であった発話は“支持・肯定”で84回（16%）、4番目は“質問”で80回（16%）であった。最も生起率が低かった発話は“賞賛”で35回（7%）であった。“賞賛”は、対象児が行った事柄に対して、療育者側から自発的に発せられた場合と対象児自身が自分の行動の成果を療育者に示したことで、療育者の賞賛が引き出された場面で認められた。

### 療育者Bの各発話カテゴリーの生起率

療育者Bの発話数は、合計で589回であった（“特定不能”、“エコラリア”の合計154回を除く）。Table 3の発話カテゴリーに従い、療育者Bの発話を分類した（Figure 2）。その結果、最も生起率が高かった発話は“説明”で300回（51%）であった。“説明”では、学習場面に特徴的な問題の答えを導く説明や知識の他、対象児に行動の選択肢を示す指示的な発話、ある場面における対処方法やソーシャルスキルを伝える発話、

対象児の質問に対する返答、対象児の行動の言語化が認められた。対象児からの質問に対しては、療育者が語彙を補って返答していることが特徴的であった。これは、対象児が語彙や表現を省略した形で質問を行うことが多かったためであると考えられた。次いで、生起率が高かった発話は“支持・肯定”で124回（21%）であった。“支持・肯定”では、療育者が対象児への同意を示すために、対象児が使った言葉を用いて返答することが多かった。生起率が3番目であった発話は“呼びかけ・提案”で88回（15%）であった。“呼びかけ・提案”の中でも、療育者Bは、誘導や間接的な指示を用いて対象児に次の行動を促すことが多かった。生起率が4番目であった発話は“質問”で59回（10%）であった。“質問”では、「はい」または「いいえ」を尋ねる質問、疑問詞質問が認められた。また、対象児からの質問が不明瞭であった場合には、対象児が使った言葉を用いて質問として聞き返すことがあった。最も生起率が低かった発話は“賞賛”で18回（3%）であった。療育者Bの“賞賛”は、対象児の行動を見て、療育者Bから自発的に行ったものに限られていた。

### 療育者Aの各発話カテゴリーにおける発話成立・不成立の割合

療育者Aと対象児aの会話成立・不成立の割合をFigure 3に示した。その結果、“支持・肯定”が98%（82回）で最も会話成立の割合が高かった。次いで、“説明”が87%（151回）で2番目に高く、以降は“呼びかけ・提案”が83%（115回）、“質問”が71%（57回）、“賞賛”が43%（15回）の順であった。

### 療育者Bの各発話カテゴリーにおける発話成立・不成立の割合

療育者Bと対象児bの会話成立・不成立の割合をFigure 4に示した。その結果、“支持・肯定”が98%（122回）で最も会話成立の割合が高かった。次いで、“説明”が91%（272回）で2番目に高く、以降は“質問”が86%（51回）、“呼びかけ・提案”が85%（75回）、“賞賛”が17%（3回）の順であった。

## 考 察

### 各療育者の発話特徴と対象児からの応答の傾向

療育者別の各発話カテゴリーの生起率、各発話カテ

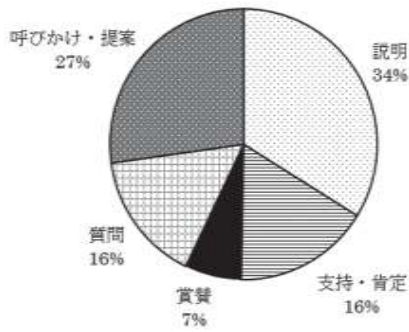


Figure 1. 療育者Aの各発話カテゴリーの生起率

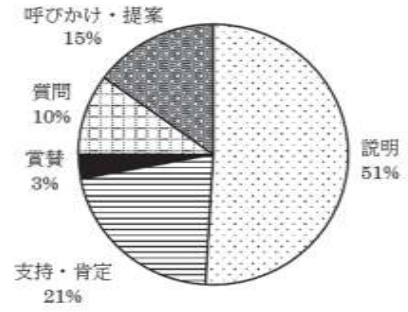


Figure 2. 療育者Bの各発話カテゴリーの生起率

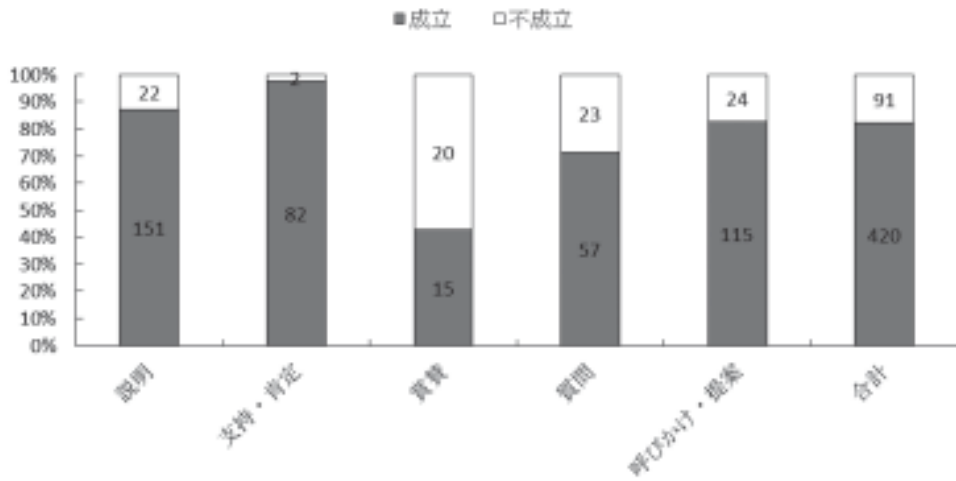


Figure 3. 療育者Aの各発話カテゴリーの会話成立・不成立の割合

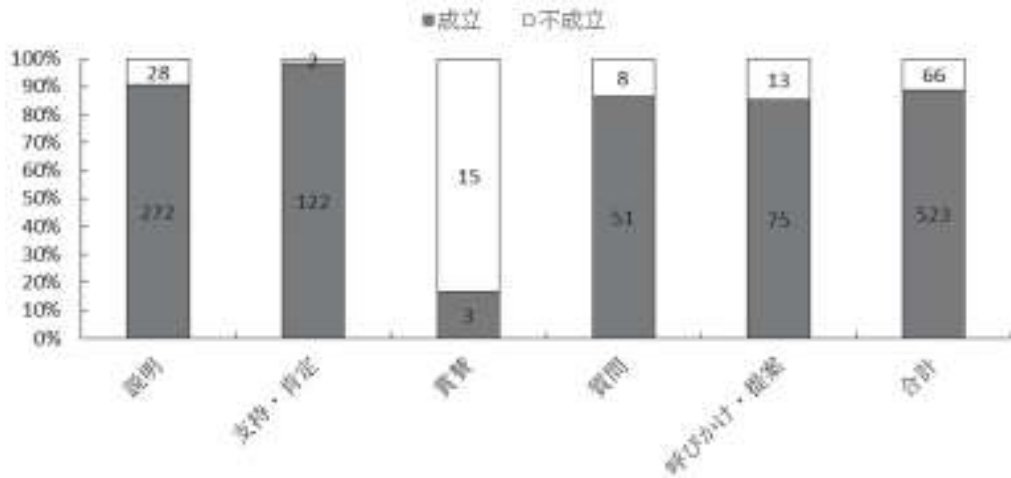


Figure 4. 療育者Bの各発話カテゴリーの会話成立・不成立の割合



ゴリーの会話成立・不成立の割合を分析した結果、以下の点が明らかとなった。Table 4に療育者と対象児の発話例を挙げる。

まず、療育者Aについて述べる。各発話カテゴリーの中で、最も生起率が高かった発話は“説明”(34%)であった。これは、対象児が混乱したり、不安になったりしないように、療育者が現在の状況や今後の予定を伝えるために多く用いられていたことが影響していると考えられた。“説明”の会話成立の割合も87%と高かった。“説明”の特徴としては、内容が明確で、具体的であることが挙げられた。さらに、対象児の言葉を意味的・文法的に広げて返す発話も多かった。このことから、曖昧な言い回しや言葉で直接表されていない言語外の意味理解に不得手さがあるとされる自閉症スペクトラム児にとって、“説明”は理解しやすい発話であると推察された。また、療育者が「○○でしょ。」のように対象児の言い誤りを直して伝えても、対象児からの応答は得られなかったり、間違った言い方を使い続けたりすることがあった。一方で、「○○と言えいいね」のように「言う」という動作を示す言葉を含んだ発話では、対象児が正しい言葉遣いに直すことができていた。したがって、対象児は、具体的な指示が含まれていない、またはニュアンスが含まれた発話を捉えることが難しいと考えられた。したがって、対象児に説明を行う際には、伝えたい内容を丁寧に言語化する必要があると考えられた。

次いで、生起率が高かった発話は“呼びかけ・提案”(27%)であった。生起率が高くなった要因としては、療育者が対象児に対して、声をかけたり、間接的な指示や誘導を行ったりすることで、対象児に次に行うべき行動に気付かせるなど、対象児の自立につながる関わり方を行っているためであると考えられた。また、療育者Aが担当する対象児aは、周囲の物音に対して過敏であり、それによって注意がそれやすい傾向がある。そのため、対象児が学習に注意を戻すことができるように、療育者が声をかける場面が多く見受けられたことも生起率が高まった要因の一つであると推察された。“呼びかけ・提案”の会話成立の割合は83%と高かった。会話成立は、前後に対象児と療育者の会話がなく、単独の発話として療育者より発せられた場面で多く認められた。しかし、会話不成立場面では、他の話題の途中で療育者が唐突に声をかけていたり、対象児がエコラリアを発している最中に話をしていたりした。こうした場面では、会話が不成立となった後も、対象児は引き続きエコラリアを発していたり、特定不能のカテゴリーに含まれる独り言を言っていた。つまり、エコラリアや独り言などを発していて注意が逸れているときは、他者からの発話に注意を向けることが難しいと考えられた。このことから、療育者は、対象児の名前を呼ぶなど、対象児の注意を療育者に向けた

上で声をかけることが有効であると考えられた。また、エコラリアを発していないときに声をかけるなど、言葉がけを行う状況を見極めることも一つの工夫として挙げられるだろう。さらに、療育者が「大丈夫?」、「どうですか?」といった声かけを行った時に会話が不成立となっていた。つまり、対象児は、問われている内容が不明瞭で、漠然とした発話を捉えにくいと考えられた。したがって、療育者は、単語の中に含まれている省略された内容を対象児が推測せずに理解することができるように丁寧に言葉を足して伝える必要があると考えられた。

次に“支持・肯定”についてである。“支持・肯定”は発話生起率が16%と全体の3番目の高さであったが、対象児との会話成立の割合は98%と最も高かった。会話成立場面は、対象児の発話に対して療育者が応答した場面で認められることが多かった。このことから、対象児との会話ターンを途切れさせないように、会話を維持させる役割で用いられている可能性が考えられた。これが、会話成立の割合が高くなった要因の一つであると推察された。

生起率が4番目であった発話は“質問”(16%)であった。“質問”の会話成立の割合も発話カテゴリーの中で4番目の高さであったが、71%と数値上は低くない結果となった。重度の自閉症スペクトラム児を対象とした発話応答の研究においては、対象児に対して何らかの応答を求めたり、行動の変化を促したりする指示的発話は対象児からの応答率が低かったことが報告されており、この指示的発話には“質問”も含まれている(廣澤・田中, 2008)。このことから、本研究のような言葉でのやりとり大きな制約のない自閉症スペクトラム児においては、“質問”への応答率が高くなることが推察された。ただし、情報量が多い質問は、対象児からの応答が得られにくかった。また、“質問”に対して、対象児が「分からない」と反応している場面では、疑問詞質問が多く用いられていた。つまり、答え方が多様に存在する問われ方は対象児にとって負荷が大きく、応答しにくいと考えられた。本研究においても、具体的な言葉や選択肢を提示した場合や対象児が話す内容を療育者が汲み取り、“質問”の形で尋ねた場合には、対象児からの応答が得られた。したがって、“質問”を行う際には、答えの選択肢を提示したり、対象児が「はい」または「いいえ」で回答できるように工夫することが有効であると考えられた。

最後に、生起率、会話成立の割合ともに最も低かった発話は“賞賛”であった。会話不成立場面では、対象児が無反応であることが多かった。会話不成立場面の療育者の“賞賛”は、「良かった」や「ぼっちり」など曖昧な表現でなされていた。一方で、会話成立場面では、対象児が何に対して褒められているのかを理解しやすい発話となっていた。また、対象児が自分の

行動や作成物などの成果を療育者に見せることで、療育者の“賞賛”が引き出された場面において会話が成立していた。このことから、対象児が褒められている理由を理解しやすい形で賞賛を行う必要があると考えられた。具体的には、対象児の行動や結果までの過程を交えて“賞賛”を行ったり、作品などの具体物がある状況で“賞賛”を行うことで、対象児が理解しやすくなると考えられた。

次に、療育者Bについて述べる。各発話カテゴリーの中で、最も生起率が高かった発話は、“説明”(51%)であった。“説明”の生起率が高くなった背景には、対象児bが療育者に対して質問を多く行う傾向があったことが関連していると推察された。会話成立場面では、療育者が“説明”を行う際に、対象児bが用いた言葉に語彙を補足した形で返答していることが多かった。一方で、対象児の発話に対し、療育者が「また今度ね」と回答を先送りにした場面では、「また今度」という言葉の意味を対象児は捉えられない様子で、療育者に対し、もう一度同じ質問を繰り返していた。また、会話成立場面においても、対象児が「悪いことかどうか」を尋ねた時に、療育者から「悪い」または「悪くない」の言葉を用いた返答がもたらされないと、対象児が同じ質問を繰り返しているという特徴が認められた。このことから、同じ意味や内容の発話であっても、別の言葉で表現されると、同じ内容として受け取

ることが難しい可能性があると考えられた。したがって、対象児の言葉を補足説明した形で返答する場合にも、対象児が用いた表現を重視する必要があると考えられた。また、対象児が言い誤りをした際に、療育者が「〇〇と言ってくれた方がいいね」と伝えると、対象児は正しい言葉遣いに言い直すことができた。これは、療育者Aと同様の結果であった。

次いで、生起率が高かった発話は“支持・肯定”(21%)であった。この背景には、対象児bが療育者に対して是非を求める発話を多く行っていたことが影響していると推察された。また、会話成立の割合においては98%と最も高かった。ただし、会話成立場面においても、対象児の発話に対して療育者が「うん」のように一言で返事をした場面では、療育者からのさらなる返答を求めて、再度質問を行っていた。このことから、端的な発話やあいづちのみの返答では、療育者の同意の意思を捉えにくい可能性があると考えられた。したがって、“支持・肯定”を行う際には、端的な返答に加え、同意した内容を繰り返し伝える工夫が有効であるかもしれない。

生起率が3番目であった発話は“呼びかけ・提案”(15%)であった。会話不成立場面では、複数の内容を含んだ情報量の多い発話が行われていた。会話が不成立となった要因としては、対象児が情報量の多さによって、混乱したためであると推察された。したがって

Table 4 療育者と対象児の発話例 (会話成立)

分類	話者	発話内容	
説明	対象児	漢字の答え見たら、まずいか？	
	療育者	答え合わせが終わったら見ても大丈夫だよ。	
	対象児	勉強中はダメか？	
	療育者	うん、問題を解いてるときに見ちゃうと、ちょっとね、その問題に答え見ながら解くことになるから。	
	対象児	ずるい？	
	療育者	うん、ちょっとずるいかな。	
	療育者	でも、どうしても分かんなくて、答え合わせの時に見るのは大丈夫だよ。	
	対象児	うん。	
	支持・肯定	対象児	受注。
		療育者	そう、受注。
対象児		受注って読むんだ。	
療育者		うん、そうだよ。	
賞賛	療育者	すごい。	
	療育者	a君、集中してて良かったね。	
	対象児	はい。	
質問	療育者	a君、何読んでるんですか？	
	対象児	妖怪ウォッチです。	
呼びかけ・提案	療育者	a君、いいですか。	
	対象児	え？	

て、対象児に対して“呼びかけ・提案”を行う際には、複数の内容を一度に伝えずに、1つ1つの内容をそれぞれ伝える必要があると考えられた。

4番目の生起率であった発話は“質問”(10%)であった。対象児から適切な応答が得られにくかった場面では、対象児の質問に対して療育者が“質問”で聞き返しを行っていた。このことから、対象児にとって療育者から正しい答えがもたらされるという、求めている回答とは異なる返答がなされた時の応答に困難さがある可能性が考えられた。また、「どうしたの?」といった答え方が多様に存在する質問においても、対象児が無反応となるが多かった。これは、対象児が尋ねられている内容を捉えにくかったことが要因であると推察された。

最後に、生起率、会話成立の割合ともに最も低かった発話は“賞賛”であった。この結果は、療育者Aと一致した。会話不成立場面では、療育者が「いいね」、「すごいね」といった曖昧な表現を用いていた。このことから、褒められた内容の分かりにくさが応答をしづらくさせている要因の一つであると考えられた。したがって、対象児に“賞賛”を行う際は、療育者が“賞賛”の内容を具体的に示し、明確に伝える必要があると考えられた。ただし、具体的な内容で“賞賛”を行った場合も一貫して応答が得られているわけではないため、“賞賛”に対する応答には、発話内容の不明瞭さだけでなく、他の要因が影響している可能性も考えられた。

### 総合考察

本研究の結果から、療育者A、Bの発話の傾向として、“説明”を用いることが多いこと、また“質問”や“賞賛”の使用が少ないことが見出された。また、対象児a、bとの会話成立・不成立の割合から“賞賛”において会話が不成立となることが多いことが認められた。以下、特に会話不成立時に特徴が見られた“質問”と“賞賛”の2つの発話について、会話不成立となった要因を考察する。

まず、“質問”について述べる。療育者の“質問”に対して、対象児が反応しなかった場面では、疑問詞質問が多く用いられていた。この結果は、これまでの多くの先行研究と一致している(井上他, 1999)。さらに、井上他(1999)は、疑問詞質問に関して、特に「何」「どこ」に対する応答は、文脈や質問をする相手によって応答の内容や言い回し等を使い分けるといった聞き手の制御を強く受けるために、答えが一つとは限らなくなると述べ、聞き手がどのレベルでの情報を要求しているのかをコミュニケーションの文脈から弁別する能力が必要となると指摘している。このことから、疑問詞質問への応答には、高いコミュニケーション技能が必要であることが推察される。したがって、疑問詞質問を行う際には、井上他(1999)が指摘した

ように、療育者側が疑問詞の語順を意識することが必要であると考えられた。

次に、生起率、会話成立の割合ともに最も低かった“賞賛”について述べる。菊池・古賀(2001)では、他者である大学生や母親の顔写真に対する自閉症児・者の表情認知の正答率が健常幼児と比較して低かったこと、健常幼児とは異なり、「嬉しい」の表情認知に優位性が認められなかったことを報告し、自閉症児・者は他者の表情認知に関して明らかな困難さを有していることを指摘している。表情は、日常生活において、他者の感情を理解するための大きな手掛かりとなっているだろう。このことから、本研究において示された“賞賛”における会話成立の割合の低さは、自閉症スペクトラム児が有する表情認知の困難さが影響している可能性が考えられた。それゆえに、自閉症スペクトラム児にとって“賞賛”を理解しやすいものとするためには、非言語行動の読み取りにくさを補う工夫が必要であると考えられた。つまり、言語による“賞賛”においては、本来非言語行動からもたらされる情報を付加した表現が必要であるだろう。本研究においては、「素晴らしい、全問正解だ」といった“賞賛”に加えて、「やったね」と対象児の気持ちを療育者が言語化して伝えた場面があった。この場面では、対象児からの応答が得られており、会話が成立となった。このことから、言語で“賞賛”を行う際には、賞賛を得られた具体的な行動に加えて、喜びや嬉しさといった“賞賛”に伴う感情を言葉で合わせて伝えることが、“賞賛”の受け止めやすさにつながるかもしれないと考えられた。また、療育者が“賞賛”を用いる割合が少なかったことに関しては、対象児からの応答率の低さが影響し、療育者が無意識のうちに“賞賛”を用いなくなった可能性が考えられた。しかし、“賞賛”は対象児の自尊心を高めたり、成功体験につながる重要な発話であると考えられる。したがって、療育者は、対象児からの応答が得られにくいといった特徴を理解した上で、“賞賛”を用いることが必要であると考えられた。

### 今後の課題

本研究は、学習場面において認められた発話を分析対象とした。また、対象児は他者と会話が可能なほど言語能力を有しているものであった。したがって、本研究で示した療育者の発話カテゴリーや発話特徴があらゆる自閉症スペクトラム児との療育場面において普遍的に見られるものと断定できるものではない。ただし、本研究の知見は、療育者の発話特徴や、対象児との会話において療育者が工夫すべき点を見出すために有効に利用することができると考えられる。また、本研究では、非言語行動の検討は、言語での応答が認められなかった場合のみに限られた。しかし、日常場面においては、療育者側の声の大きさ、語調、調子など

の言葉の言い方や表情や視線，身振りといった非言語行動が対象児に影響を与えていることが考えられる。したがって，療育者側の非言語行動を検討するまでは至らなかったことは今後の課題として残される。

## 引用文献

- American Psychiatric Association (2013).  
Diagnostic and statistical manual of mental disorders (5th ed.). Author, Washington DC.
- 畑中 千紘 (2011). 話の聴き方からみた軽度発達障害—対話的心理療法の可能性— 創元社
- 廣澤 満之・田中 真理 (2007). 自閉性障害児における即時性エコラリアの生起関連要因—関わり手の発語に着目して— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 55, 185-198.
- 廣澤 満之・田中 真理 (2008). 非慣用的言語行動を多用する自閉性障害児に対するかかわり手の発語の分析—かかわり手による非慣用的言語行動の理解変容過程との関係— 特殊教育学研究, 45, 243-254.
- 井上 雅彦・小川 倫央・藤田 継道 (1999). 自閉症児における疑問詞質問に対する応答言語行動の獲得と般化 特殊教育学研究, 36, 11-21
- 伊左治 智香子・根津 知佳子・高林 朋世 (2012). 伝え合う関係を築くかかわり方—フォーマットを用いた言葉の授業実践— 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 32, 57-62.
- 菊池 哲平・古賀 精治 (2001). 自閉症児・者における表情の表出と他者と自己の表情の理解 特殊

- 教育学研究, 39, 21-29
- 三宅 和夫・若井 邦夫・伊藤 則博・後藤 守・浜名 紹代・白井 博・吉村 典子 (1974). 乳幼児発達研究法の探求—2. 評定法による特性把握と相互作用過程分析— 北海道大学教育学部紀要, 23, 1-66.
- 大井 学 (2002). 「誰かお水を運んで来てくれるといいんだけどな」—高機能広汎性発達障害へのコミュニケーション支援— 聴能言語学研究, 19, 224-229.
- Rydell, P.J., & Mirenda, P. (1994). Effects of high and low constraint utterances on the production of immediate and delayed echolalia in young children with autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 24, 719-735.
- 竹田 契一・里見 恵子・河内 清美・石井 喜代香 (1994). 実践インリアル・アプローチ事例集—豊かなコミュニケーションのために— 日本文化科学社
- 館山 千絵・鄭 仁豪 (2011). 遊び場面にみられる聴覚障害幼児と健聴母親との相互作用の発達的特徴に関する研究—コミュニケーションと遊びの分析を通して— 特殊教育学研究, 49, 339-350.

## 謝 辞

本研究を執筆するにあたり，多くの方々にお世話になりました。特に，教育機関に通われているお子様とご家族の皆様，先生方におかれましては，調査をご快諾いただいたことに厚く御礼申し上げます。

—2016.1.30受稿，2016.3.12受理—



# Utterances of the Adults Training Children with Autism Spectrum Disorder

Sayaka ARAI (*Graduate School of Psychology, Tokyo Seitoku University*)

Mari NAKAMURA (*Tokyo Seitoku University*)

This study aimed to examine what categories of utterance the adults training children with autism spectrum disorder frequently used in educational training, which category of utterance is easy to form conversation with them, and to find the points that the teachers should note in the exchange of speech with them. Participants were 2 children with high functioning autism (2 boys, 14-15 years old) and 2 teachers. All of the utterances were recorded in educational training and were classified in 7 utterance categories. The results revealed that the teachers often used a category of "explanation", few "question" and "praise". In addition, "praise" couldn't form conversation in many situations. The adults' utterances that couldn't form conversation in all categories were as follows; utterances that needed to catch the implied meaning, utterances that were ambiguous, utterances that were uttered at the time when children were not paying attention, questions with interrogative construction. These results suggest that in conversation with children with autism spectrum disorder, the teachers must avoid ambiguous expression, must not omit what should be said, must not ask questions with interrogative construction. In addition, the teachers should use understandable and specific words to praise children.

**Key words:** autism spectrum disorder, teacher, utterance.

*Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University*  
2016, Vol. 16, pp.45-53